

教員紹介

今回は、人間文化創成科学研究科文化科学系助教の難波知子先生をご紹介します。難波先生は、大学院では比較社会文化学専攻生活文化学コース、また学部では生活科学部人間生活学科生活文化学講座にご所属です。

着て、楽しむ 楽しんで、学ぶ

Q ご出身、ご経歴などについて教えてください

出身は岡山です。高校まで岡山に住んでいました。大学と大学院はお茶大です。お茶大の入試の日に初めて東京に来ました。岡山のあたりですと、大学進学では関西圏の大学に行く人が多かったように思います。私も初めは東京にまでは行かないで、大阪のとある大学の住居学科に進もうと考えていました。住むことや着ることに関心があったからです。しかし、その学科の数学の試験に自信がなかったので、国立大学で服飾に関して学べるところを探して、お茶大の生活科学部人間生活学科生活文化学講座を受験しました。特にはっきりとした目標をもって入学したわけではありませんでしたが、学部の入学式直後の自己紹介で「大学院まで進学したい」と言ったことを覚えています。卒業後会社で働く自分の姿はイメージできず、何かの専門家になれたらと漠然と考えていました。学部卒業後、お茶大の大学院に進学し博士後期課程を修了しました。2012年4月にお茶大の助教に採用されました。

Q ご専門は？ 現在のご専門に興味を持たれた理由を教えてください

「日本服飾史・服飾文化論」を専門にしています。特に、近代日本における学校制服史および制服文化を研究しています。

私が、生活科学部の生活文化学講座の学生として勉強をしていた頃は、小池三枝先生や板倉壽郎先生など旧被服学科で長く指導されておられた先生がまだご在職でした。生活文化学講座に服飾分野がまだまだ残っていた時期と思います。しかし卒業論文では、服飾とは関係なく、サッカーがブラジルと日本でどのように根付いてきたかについての研究を行いました。ちょうど2002年の日韓共同開催のワールドカップが大変な盛り



Namba Tomoko 難波 知子

上がりを見せていた時期で、なぜサッカーがこのように人気があるのかを知りたいと思ったからです。卒業論文の指導教員は、生活文化学講座の鈴木禎宏先生でしたが、論文を書いた後に「あなたは、やはり服に関心があるんですね」と言われました。卒業論文の中で、サポーターが着るユニフォームについて、日本とブラジルでの違いに触れていたからです。日韓W杯では、さまざまな国のユニフォームを着て観戦を楽しむ日本人の様子が「友好的」と報道されました。熱狂的なサッカーの文化圏では、自分の応援するチーム以外のユニフォームを着用することはほとんどないそうで、そうした文化の人々の目に日本人の様子は「友好的」と映ったようでした。

サッカーのユニフォームにも文化的な差異があることに気づき、修士論文で深く研究してみようと考えました。しかしスポーツのユニフォームに関する文化を論じた先行研究がほとんどなく、あれこれ探しているうちに現在の研究テーマの「学校制服」に出会うことになりました。私の出身の岡山県は、学校制服の生産が日本一です。私は小学校から高校まで、特に好き嫌いを考えることもなく、普通に制服を着続けてきました。制服といいますが、生徒管理の手段とか個性を奪うものというようなネガティブなイメージが定着していて、その中で私の制服に対する価値観も形作られていたように思います。しかし、2002年頃からいわゆる「なんちゃって制服」と呼ばれる、制服が義務づけられていないのに制服に似せた私服を着る人たちが現れてきました。私にはこのことはとても衝撃で理解できませんでした。制服が単に学校側からの管理的な規制であり、個性を奪う抑圧的なものであれば、今の時代、制服は廃止されてもよいはずですが、現実には制服は根強く存在し、むしろ好んで着たいという人もいます。制服に

は管理や規制という意味以上に、人々が求める何かがあると感じ、その正体を探りたいと思い、研究を続けています。

Q 現在、母校の教員をされていて、どのような感想をお持ちですか？

授業の一環として、着物や袴を着たりしていますが、普段なじみのない服装に学生と一緒に挑戦することがとても楽しいです。特に和服を着られるようになりたいと思っている学生が多く、そうした学生と共に、私も和服や着付けについて学んでいます。和服の着付けには、さまざまな準備や手順が必要となりますが、学生のみなさんは面白がって協力してくれます。そうした交流のなかで改めて感じたことは、お茶大生の優秀さです。とても飲み込みが早く、理解力があり、細かなところまで気がつきます。教員の私の方が学生に助けられている感じがします。

お茶大の学生へ向けてのメッセージをお願いします

教員としてはまだまだ未熟ですが、学生のみなさんと楽しく学んで成長していきたいと思っています。今年やってみたいことは、インドのサリーや日本の束帯・十二単の着付けです。実際に着用してみて、その服装文化を体感したいです。ご興味をお持ちの方は、ぜひ一緒に着て体験しましょう。

文責：仲西 正
(大学院人間文化創成科学研究科
自然・応用科学系教授)